

課題および現況 水野 欽 司

1. 今日ほど社会的変動の激しい時代はないといわれる。人間的事象に関する問題は多様化しつつあり、解決を要する新しい社会的課題は増加する一方である。

これら新しい課題に応ずるためには、単に心理学と限らず、広く行動諸科学 (Behavioral Sciences) を統合した研究視野が必要であると思われる。

従来、応用心理学研究とよばれる多くは、総合性の点で欠くところがあり、必ずしも社会的要請に十分応じて来たとはいえないのではないか。

このような総合化の一つの側面は多種多様な情報を適確に分析・総合する方法の開拓である。

情報処理の、主として方法論分野を担当するものとしては、まずデータとは何か、人間的事象に関して集められる数量データの“数量”とは何かを素朴に問い、その限界と効用の吟味を行なうべきであると考え。われわれが追求すべきものは、社会的要請に対して実効ある形で応じられる情報処理なのであって、単なる数量化主義ではない。現在‘情報化時代’、‘コンピュータ時代’の呼称が安易な数量化主義の印象を世に与えているのは遺憾である。他方、かたくなに量化を忌避する姿勢もまた実践的でない。

将来に向けての上の意味の方法論の探究は容易なことではない。現状においては、単に‘モデル’のための‘モ

デル’に走る結果になることを戒めつつ、努力する以外にないだろう。

心理学の中での研究成果を継承すべきことはもちろんであるが、理論のためでしかない人工的実験や数理モデルと称するものは排して行きたいと考える。

2. 45年4月着任より現在まで、まず基礎的な小道具作りとして、教育心理学教室の統計機械室プログラム・ライブラリの整備拡充を急いでいる。

これらは、統計学的成果の、電算機を通しての実用化であるが、同時に電算機自身の特性を活用したデータ処理システムの開発に意を払っている。たとえば、クラスター分析の名で総称される理論とその実用化に努力している。また、これらと心理学分野における各種の尺度化 (Scaling) の手法、社会調査データの分析法との関連づけを計っている。それらの一例は、日心34回大会発表「テスト項目の系統的自動分類について」(45年8月)

その他では、過去5年来、参加している共同研究グループ「政治意識研究会」(代表者、統数研林知己夫氏)の50~60年代の政党支持の変遷と、その社会心理学的分析のまとめ(出版予定)を急いでいる。また、45年度共同研究「歩行者交通事故の研究」の一員として、愛知県

研究の方向について 小 森 孝 彦

私が一番よわることの一つは「あなたはいま、なにを研究しているか」と問われることである。そう問われると「記憶の研究とでも……」と語尾をにごして答えることとなるのだが、そう言うとすぐ「それでは S. T. M. なんの研究ですか」と問がくる。

たしかに研究の出発点は棒暗記学習の研究であったし、いまやっている研究も自由再生法とか対連合法にもとづく記憶研究の一バリエーションを記憶範囲の問題や L. T. M. —S. T. M. 問題の系の中で検討するものであった。

ところで、人間の学習実験にしめる S. T. M. 研究の位置が顕著になってきた今日、S. T. M. 研究の趨勢をみると、S. T. M. の名の下で研究されてきたものは「記憶」の名に値するものかどうかはなほ疑問となる。むしろ、それらの研究は記銘や再生にもとづく行動の研究

と呼んだ方がよいようなものであろう。理由はいろいろあるが、例えば忘却と消去を区別し、忘却の研究として「記憶」研究を位置づけようとした(例えば Unlearning の研究)、特殊な記憶研究法での記銘—再生モデルはいくつもあるが (Kinsch S. T. M. —L. T. M. モデル) それが記憶一般のモデルとはなりがたいであろうことなどからみても、そのことはわかることである。

ここに S. T. M. の研究は記憶範囲の研究と結びつくわけがあるのであって、記銘や保持が完全にやりとげられないがゆえに、より適切な記銘法を求めるという行動が生まれ、より効果的な記憶とはなにかという問題が記憶容量の限界との関連で考えられることとなるのである(日心33回発表)。

記憶法、記憶行動の研究という以上の視点からは S. T. M. 研究は作業にとって不適切な項の再現不可能とな